Title: 02-04奥村先生.eca Page: 2 Date: 2018/03/12 Mon 10:22:50

ルポ 第一線医療 Vol.274

精神病理学とさらにその奥にあるものとへの興味

奥村（おくむら） 克行（かつゆき） 先生

（品川区 五反田駅前メンタルクリニック）

人の感覚というのはけっこうあてにならないもので、たとえば上野公園は上野駅の右のほうだからと目白駅で山手線の先頭に乗ると正反対だったりする。

片倉が五反田に降り立ったのは今回が初めてだが、山手線五反田駅の西口は意外にも山手線の内側ではなく外側であった。

目指すクリニックは駅のすぐそば、８階まで飲食店が並ぶビルの９階。

↑ インタビューする片倉和彦編集部長。

↑「様々な分野を勉強することは、考え方の幅を広げることにつながっている。患者さんにも、いろいろな考え方やものの見方を提示できるようにしたいと思っている」と奥村克行先生。

大都会での華やかな精神科治療を目指しているのかと思っていたが、そうでもなく「都会の真ん中のほうが隠れやすい」ということだった。

９階は奥村克行が借りるまではオーナーの居宅があったところであり、その隠れ家の雰囲気の中で、奥村克行は患者さんの話をじっくり聞いている。

◆

医学部を卒業して精神科医を目指す人たちにはさまざまな動機がある。自分の過去の体験、心理学や精神病理学や脳科学への興味、経済的安定、きっかけとなる出会い、

などなど。

奥村の場合は、精神病理学と、さらにその奥にあるもの、への興味が主な動機であった。

転校が多かった奥村は、高校で不適応を起こしたことがある。

「成績も悪かったし青年クライシスだった」と彼は振り返る。そのころ、中井久夫神戸大教授の著書を書店で立ち読みし、精神病理学への興味が湧いてきた。精神科が天職だなと思った。

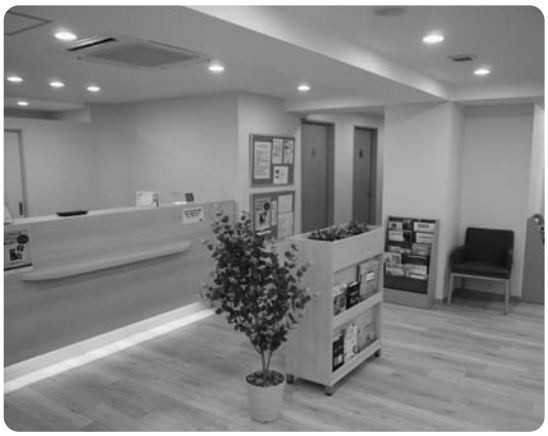
北海道大学理学部生物学科に入学。DNAよりはむしろ生態に興味があった。北大のYMCA寮で現代数学の父と言われるヒルベルトの著作を読み、根本はお釈迦さまとも現代思想とも共通するのではと考えていた。

北大を卒業してからガードマンのバイトをしながら勉強して京都府立医大に入りなおした。精神科医になりたいと最初から思っていた。「医者への興味はあまりなかった」と彼は言う。大学時代も「本が狂ったように好きだった」ため、量子力学などいろいろな分野の学問の教科書を読んでいった。

卒業後、京大の医局で木村敏名誉教授の勉強会に参加した。東京武蔵野病院で医史学や文化精神医学の先生に導かれ、病跡学（歴史的人物の精神心理状況を研究する）に興味を持ち、日本病跡学会で発表した。

また、日本東洋医学会、日本中医学会、日本東方医学会、という少しずつアプローチの違いのある学会で東洋医学と東洋思想とについて研究してきた。

奥村は病院生活が肌に合わず、どうしたものかと悩んでいた。そのとき、妻、妹、



↑　受付の様子。

おじさん、知り合いの薬品会社の人などがどんどん引っ張ってくれた。

開業場所を探し回っていたところ、何代も前から、それこそ五反田村のころから代々生活を営んでいたビルのオーナーさんが「今まで住んでいた９階を貸すなら医者がいい」と言ってくれて、現在地への開業が決まった。2015年５月に開業して現在に至る。妻と妹は今も医院のスタッフをつとめてくれている。

◆

なお、奥村は自分では世間不適応人間だと言っているが、実はしっかりした人である。日本精神神経学会認定精神科専門医、精神保健指定医、日本医師会認定産業医、などの精神科に必要な資格をしっかり取得している。

また、クリニックには診察を受けに来た人が困らないような予約の仕組み、待合室のつくり、固有名詞を他の人に特定されないような呼び方、などさまざまな工夫をし

↑ 院内に入るとすぐに待合室になっている。広々とした室内に木目調の床がやわらかく、温かい印象を与える。テーブルは患者さんがリラックスできるように、席ごとに仕切られている。

↑ 診察室は、患者と医師がテーブルを挟んで対面で話しあうスタイル。しっかり説明して、患者一人ひとりに合った治療方法を患者自身に選んでもらえるように心がけている。

ている。

患者は20～30代の若い層が多くを占め、地域の住民や周辺に勤めている人がほとんど。

「ずっと通ってくれる人ばかりではなく、初診でたっぷり話をして、その後は来ない、という患者も少なくない」というのも１つの特徴だ、と奥村は語っていたが、もしかしたらその患者さんはその後他の医療機関にドクターショッピングしたわけではなくて、１回の傾聴でそれで良くなったのかもしれない、と片倉は思った。

保険医協会には開業と同時期に入会していて、新入会員歓迎懇談会にも出席している。都内に友人が少ないので、積極的に行事に参加して、つながりをつくりたいと考えている。

さて、【現代思想においては実在論が常に構造論と対立しているわけではなく両方の見方をできるのがよい。様々な構造を用いて「そんな考え方もあるのだねー」という検挙な態度で物事に臨む。構築と脱構築との繰り返し。

さらに、両方の見方が成り立つという中観論もあり、仏教においても色と空とが対立しているわけではなくメタな目が必要である。

それでも人間同士が一致できる地平線を現代思想で考えていきたい。そのためには無矛盾性、完全性が基本となるが、それをもっとも鋭角に純粋に表現できるのはヒルベルトに始まる現代数学である。】という奥村の現在の思考の到達点については、後日、彼自身の原稿で語っていただこうと思う。

（文中敬称略）

（片倉　和彦＝本誌編集部長）